

に涉らん。

b 愚応えて曰く、古を稽ぶるにこれ有り。班固は漢書を作り、事に坐し没して未だ就せず、和帝は固の女弟曹壽の妻昭に詔して踵^つぎてこれを成さしむ。孫盛は晋春秋を作り時事を直書するに、桓温の権と雖もこれを慄^{おそ}れず。宋の知雙流泉李燾初めて司馬光を継いで宋百官表を作る、徧く正史・実録を求め、旁に家集・野史を采り、建隆より起し靖康におよぶまで、凡そ九十卷。翰林学士周麟之は高宗皇帝に言い、詔して筆札を給し、録して史館に付せしむ。既にして燾復た資治通鑑の例に倣い、前書を櫟^も括し、続通鑑長編を為り、自らこれを朝に上る。三氏の作、皆国家の中葉に当り、当時の朝廷皆その成るを觀るを樂しみ、未だ嘗て以て嫌と為さざるなり。区区たる通紀も殆ど三氏の遺矩ならんか。

まず友人から指摘されたのは、わが明朝では国史・実録が編纂されているものの、それらは皇史宬^{じやう}のような宮中の石室に收藏されて、わずかに翰林院の諸公しかこれを見ることはできず天下に伝わっていない。それなのに、史官の職でもない在野の陳建が同時代史を著そうとすることへの危惧であった。

これまでにかかる先例が有るかと問われて、陳建は、古にも例があるとして、後漢の班固の『漢書』、東晋の孫盛の『晋春(陽)秋』^⑤、南宋の李燾の『続資治通鑑長編』を挙げた。これらの三つ著作は、いずれも国家の中葉に作られたが、時の王朝はその完成を歓迎こそすれ、嫌疑されることがなかったではないか。この通紀もこうした先例に倣って編纂しようとしたのだ。

c 且つ我が朝の国史・実録の天下に伝わらざるや、伝えんと欲せざるには非ざるなり。卷帙繁多、謄写すること惟れ艱きを以て、伝えんと欲するも易からざるなり。禁閣嚴邃にして、外人罕^{すく}に至るを以て、伝えんと欲するも而れども能わざるなり。

e 然りと雖も亦たこれを伝えるもの有り。大明会典・皇明政要・五倫書・開国功臣録・殿閣詞林記・双槐歲抄・餘冬序録の載せるところ如き、皆これを実録に本づくに非ざる無し。三朝聖諭録・天順日録・名臣言行録・經濟録・守溪長語・孤樹哀談の類の如きは、則ち又た国史・実録と相表裏を為すに非ざる無し、而して猶或いは以て国史の未だ備わらざるところのものを補うに足るなり。是れ諸書固より已にこれを天下に播つ、但各おのを以て義例を為り、散出統無く、学ぶ者をして考実貫通するに艱からしむ。

陳建はこれに続けて、我が朝で国史や実録の内容が伝わらないのは、伝えようとしなからではなく、卷帙が膨大で抄録するのが困難であったり、禁中秘閣の奥深いところに收藏し、一般の人は稀にしか行けないからだ。

とはいえ、『大明会典』(弘治勅撰、一八〇卷、正徳四年序刊本)、『皇明政要』(婁性輯、二〇卷、弘治十六年刊)、『五倫書』(宣徳勅撰、六二卷、正統十二年刊)、『皇明開国功臣録』(黄金著、三三卷)、『殿閣詞林記』(廖道南著、二二卷、嘉靖刊)、『双槐歲抄』(黄瑜著、一〇卷、嘉靖二十八年序刊)、『餘冬序録』(何孟春著、六〇卷、閏五卷、嘉靖七年序刊)などは、実録に基づいて編纂されたもので、その内容の一部は民間にも伝えられている。また『三朝聖諭録』(楊士奇録、

三卷)や『天順日録』(李賢著、二卷)、『皇明名臣言行録』(楊廉著、

四卷、沈應魁著、新編三四卷、嘉靖三十二年刊)、『皇明經濟録』(黃溥著、一八卷)、『守溪長語』(王鏊著、一卷)、『孤樹哀談』(李默著、

一〇卷)などは、国史・実録と表裏をなすもので、国史の不備を補う意味を持っているとしている⁴⁶。ただこれらの書物はそれぞれの編纂スタイルをとっているため、学ぼうとする者が史実を考察するのを難しくしているとしたうえで、通紀の編纂の必要性が主張される。

f 故に今この紀は特に通鑑長編の遺に倣い、起するに国初より正徳におよぶまで、繁を芟き会要し、萃次編を成す。于に叙述を以て我が祖宗列朝の俊徳神功の鴻休盛烈、訐謏遠猷の良法美意なるを鋪張し、以て天下来世に昭示す。而して大意は奕世の聖子神孫の祖武を繩き成憲を監み、因循玩愒の弊を振し、先甲後甲の図を為し、以て鴻業を億萬斯年の永えに保たんと欲す。斯れ固より体国愛君・憂時察治は、君子の聞かんと欲するところ、而して何ぞ躋しとざることこれ有らんや」と。

g 或いは曰く、「李燾の長編嘗てこれを朝に上る。子孟ぞ併せてその武を歩まざらんや」と。曰く「仕止だ殊なり。燾のこれを朝に上るや、以て当に仕えるべきなり。愚は家食すること久し、身既に隠れり。焉くんぞ文を用つて之かん。且つ年は耳順に垂とす、衰病の余り、丘に首すること淺淺、尚奚を以てか為さん、尚奚を以てか為さん、聊かその語を記し、以て観る者に諒げんと。

通紀は、『統資治通鑑長編』に倣つて国初から正徳年間までを叙述し、祖宗以来の徳功と謨法を天下後世に明らかにして、大いなる功

業を末永く保つことにあるとしている。

さらに、李燾が長編を朝廷に献上して中央の官職を得たように、仕官の希望があるのかという問いには、自分は職を辞して家居することが長く、まもなく六十歳に手が届こうとしており、その気持ちはさらさらないと否定した。凡例の末尾にこうした編纂の意図まで縷々記すのは、必ずしも一般的ではなく、陳建自身の真意を測りかねるところがある。とはいえ、最後に強調したように通紀編纂の目的が官界での榮達とは関わりなかったことは認めてよいであろう。

ここで注目したいのは、明朝では国初以来実録の編纂がなされていたものの、閲覧できる者は一部の官僚に限られているという陳建の状況認識である。こうした中で、在野の知識人が抱いていた同時代史への渴きを癒やすべく歴史書を編纂することは、それほど困難ではなくなりつつあった。というのは、嘉靖年間に入って民間の出版が飛躍的に活発化したために、陳建自身も挙げたように、『大明会典』や『五倫書』のような勅撰書以外にも、実録に基づき国史の不備を補う書物が次々と出版されるようになっていたからである。しかも、官を辞し郷里の広東で過ごしていた陳建がそれらの書物を購入したり、或いは借閲してたやすく繙ける環境が出来つつあったことがより重要である。なによりも、陳建が巻目に続けて載せた「採拋書目」の百種を超える書名が、こうした環境が整いつつあったことを雄弁に物語ってくれる。

三 禁書の行方——重刻と続編出版

1 万曆重刻

隆慶五年（一五七二）九月に焼却処分⁴⁷の決定が出されると、その措置は直ちに実行に移されたであろう。嘉靖原刻本の『皇明歴朝資治通紀前編八巻 後編三十四巻』が、前号で明らかにしたように台湾の国家図書館所蔵本（前号掲載 図1、図2）、および残欠本の東洋文化研究所蔵大木文庫本（前号掲載 図3）や中国の国家図書館所蔵本（前号掲載 図4）を除いて、いずれも現存が確認されていない⁴⁷こと。嘉靖末隆慶初に刊行されたと目される前述の十四巻本の『新刊校正皇明資治通紀』⁴⁸が、台湾の国家図書館にのみ所蔵し天下の孤本であることは、これを十分に推測させるものである。

しかしながら、王朝による禁書指定の効力がその後も明代を通じて持続していたかという点、そうではなかった。事實は、禁書指定後も明朝滅亡にいたるまで、陳建の皇明通紀とその続編は、続々と出版され続けたのである。

陳建自身が皇明通紀の中で扱っているのは正徳末年までであるが、万曆以後、これに続けて後人による諸種の増補版やダイジェスト版が出版された。これらは、皇明通紀とは異なる書名を冠して刊行されていることから、書目類では一般に別個の著作として扱われている。実際、本来陳建撰とされる部分も、増訂者によってかなりの削除や加筆が施されている。しかし、ここでは陳建の皇明通紀の普及と影響の全容を明らかにするために、増補版やダイジェスト版をも含めて皇明通紀とその続編としてまとめて整理した。これによって、

とくに万曆年間以降、南京や蘇州、松江、あるいは福建の建陽や浙江の湖州などで、さまざまなタイトルを付して皇明通紀とその続編が出版され続けた実情が明瞭に浮かび上がることが期待されるからである。

まず早くも万曆初年（一五七三）には、南京の坊刻摘星樓が『新鐫官板音釋標題皇明通紀』十巻本を出版している（図5）。天理図書館所蔵本や東京大学総合図書館所蔵本には、「嘉靖乙卯」の紀年のある陳建自序を収め、「凡例」のあとに新たに「国朝名臣総歌」「採摭書目」（二一九種）を付している。版式は、一二行×二五字である。関西大学図書館所蔵の内藤文庫本⁴⁹は、後述するように嘉靖や隆慶年間を増補した十三巻本であるが、巻十巻末に付した蓮牌木記の刊記には、「皇明萬曆新春廣東莞東莞臣陳建著刊」（図6）とある。また国立公文書館（旧、内閣文庫）所蔵本や北京大学図書館所蔵本の封面には、「官板資治／皇明通紀／金陵摘星樓梓行」（図7）とあり、わざわざ官府で刻印された官刻本を装うかのような「官板」という文字まで付けられているのは興味深い。お茶の水図書館所蔵本の第一冊自序前と続紀の冊首には、每半丁三個、計六個の題簽（書簽）「官板皇明通紀 巻」を一枚に彫刻した一丁を付綴しているのも、同様な意図が感じられる。摘星樓については、『全明分省分県刻書考』などにも見えず、手がかりがない。

前述したように刊記に「皇明萬曆新春廣東莞東莞臣陳建著刊」（傍点、引用者）と大書しているのは、隆慶年間に穆宗皇帝の命として出されていた禁書の指定が皇帝の代替わりによってその効力を失効したことを示唆する表現とも受け取れるが、定かではない⁵⁰。

また万暦十四年には湖州府烏程県の凌稚隆が『重刻校正増補皇明資治典則』十巻を出版している(図8)。巻首には、「皇明典則序」「前編巻目」「採掇書目」(一二種)を付している。本文の版式は一二行×三〇字である。管見のかぎりでは天下の孤本と目される国立国会図書館所蔵本の封面には、「皇明通紀」と大書し、左右に「謹按原本」「重校増補」(図9)とある。ここにいう「原本」とは、金陵摘星樓十巻本のことと考えられる。

凌稚隆は、字は以棟、号は磊泉、浙江湖州府烏程県の人である。捐納監生(例貢)の出身であるが、先代以来の家学を継承して典故の学に詳しかった。⁵⁴凌の編輯刊行した書には、『春秋左伝注評測義』七〇巻、『史記評林』一三〇巻、『史記纂』二四巻、『漢書評林』一〇〇巻、『漢書纂』不分巻など史部の書が多く見られる。⁵⁵また兄の迪知(室名、桂芝館)は、嘉靖三十五年の進士で、官は兵部員外郎、大名府通判などを歴任する一方、『古今万姓統譜』『国朝名公朝翰藻』『皇明経世類苑』『文林綺綉五種』などを出版している。⁵⁶

本書には「萬曆丙戌歲仲冬之吉」(図10)と紀年を明記した陳建の自序「皇明典則序」を載せているが、丙戌すなわち万暦十四年の時点では、陳建は前述したようにすでに鬼籍に入っていることから、凌稚隆が序文の紀年を勝手に書き改めたものであろう。

巻目や本文巻一の巻首題に刻まれた「皇明資治典則」の「典則」の文字は一回り小さく、埋木によって後から挿入したと考えられる。また巻目の版心には「皇明資治□□」とあり、二字分が削り取られている。おそらく、「皇明資治通紀」とあった「通紀」の二字を削ったものであろう。二字を削り取り「皇明資治典則」と改めた理由と

して、皇明通紀が禁書に指定されていたことにより何らかの問題が生じることを回避したものと推測される。とはいえ、前述したように封面には「皇明通紀」と大書しているのは些か不可解であるが、その後に、禁書が緩んだ時期に封面のみ新たに付け加えられた可能性が考えられる。⁵⁷なお、巻十の巻末五十九葉の裏が欠けており、刊記が存在したかどうかは明らかではない。

上海図書館には、『重刻校正大字皇明資治通紀』残欠本(存巻六至十)を所蔵する。本文の版式は一二行×三〇字。巻十の末葉六十葉には、「新刻皇明典則終」「呉興凌稚隆重梓」の記載がある。巻六の巻首題は「重刻校正大字皇明資治通紀」(図11)、巻七のそれは、「新刻校正大字皇明資治通紀」とある。巻八・巻九・巻十の巻首題は「新刊校正皇明資治通紀」と一定していない。ただ、国立国会図書館所蔵の「重刻校正増補皇明資治典則」とは、「典則」の二字を除けば同一パターンであり、同じ版木を用いたものであることが判る。「通紀」の二文字は、一回り小さいうえに稚拙で、いずれも埋木によるものである。おそらく、上海図書館本が後刷りであろう。これが事実とすれば、「典則」と埋木されていたのが、あらためて「通紀」と埋木されたことになる。

凌稚隆の皇明資治典則十巻本と同一系統に属すると考えられるのが、ソウル大学奎章閣所蔵の『重刻校正大字皇明資治通紀』残欠本(存巻二至六)である。⁵⁸ソウル大学奎章閣本の存巻部分である巻二の巻首題は「重刻校正皇明資治通紀」、巻三、巻五、巻六の巻首題は「重刻校正大字皇明資治通紀」(図12)、巻四の巻首題は「新刻皇明資治通紀」と一定していないものの、皇明資治典則の巻首題の記載とは

ば一致する。本文の版式は、一二行×二五字。『奎章閣圖書中国本綜合目録』（一九八二年、一二二頁）の書誌では、「清版」としてゐるものの、字体その他から見て万曆刊本と推定される。典則との出版の前後関係については明らかではない。

2 続編の登場

その後、陳建のあとを継いで、嘉靖や隆慶年間を増補した続編が登場した。前述した『新鐫官板音釋標題皇明通紀』十卷本に、嘉靖・隆慶年間を増補した続紀三卷を合わせた十三卷本も出た。国立公文書館所蔵内閣文庫本、お茶の水図書館所蔵本（徳富蘇峰蔵書）、北京大学図書館所蔵本がそれである。続紀三卷のうち、卷之上と卷之中は世宗肅皇帝を、卷之下は穆宗莊皇帝を扱っている。卷首題には、「秀水 ト大有纂述 ト大典校正」とある。ト大有については後述する。

この十三卷のほかさらに二種の十三卷本が存在する。『重刻校正増補皇明資治通紀』十卷続紀三卷である。一つは、清華大学図書館ハーバード大学燕京図書館などに所蔵する。さきの十卷本に、ト大有が続紀卷之上・中の嘉靖年間と卷之下の隆慶年間の三卷を増補したものである。清華大学図書館所蔵本には、「皇明資治通紀／謹按原本攷訂／重刻校正無差」という封面がある。版式は、『新鐫官板音釋標題皇明通紀』と同様に一二行×二五字である。陳建の「皇明通紀序」、目録、「採摭書目」（一一九種）、「新刻目例」を付している。

もう一つは、東京大学東洋文化研究所所蔵の大本文庫に所蔵する同一書名の『重刻校正増補皇明資治通紀』十卷続紀三卷（欠卷三、

卷九、卷十）である。版式は一二行×三〇字で異なり、陳建序、「刊皇明通紀採摭書目」（一一七種）、「通紀凡例」を付し、続紀三卷は卷之上、卷之中、卷三に分かれてゐることから、別本である。

嘉靖末隆慶初に十四卷本の『新刊校正皇明資治通紀』が刊刻されたことについてはすでに前号で触れた。台湾の国家図書館所蔵本（一四行×二七字）がそれである。同じく十四卷本であるが、版式の異なる『新刊校正増補皇明資治通紀』十四卷も存在する。中国人民大学図書館所蔵本（一五行×二九字）と浙江図書館所蔵本である。前者について、書目では「明嘉靖三十四年（二五五五）陳氏自刻本」としているが、すでに明らかにしたように四十二卷本が嘉靖原刻本であるから嘉靖三十四年の陳氏自刻本ではありえない。おそらく隆慶か万曆年間に刊行されたものであろう。

北京師範大学図書館所蔵の『新鐫皇明紀政録』十二卷は、十二卷本の続編の中ではおそらく早期のものと考えられる。これは、摘星樓の『新鐫官板音釋標題皇明通紀』十卷本に、嘉善の袁黄が嘉靖年間を補った卷十一、秀水のト大有が隆慶年間を纂補した卷十二からなる。本文の版式は一二行×二八字である。陳建の名を記した「新刻皇明紀政録序」を収めるものの、刊行時期は明らかではない。続記を補った十三卷本との前後関係も不明である。善書の実践で知られている袁黄（字、了凡）は、万曆十四年の進士である。宝坻知県をへて兵部職方主事に拔擢され、朝鮮の役に参画したこともあったが、万曆二十一年三月に官籍を剥奪され、郷里に戻って家塾を開き著述に専念したという。おそらくこの時期に袁が執筆して補ったのであろう。

さらに蘇州の閭門で『新鐫李卓吾先生增補批点皇明正統合併通紀統宗』十二卷本、首一卷、附録一卷が出版された(図13)。巻一一を袁黄が、巻一二を卜大有が補輯している。台湾の国家図書館やハーバード大学燕京図書館⁶⁵、北京師範大学図書館(存巻一・七)などで所蔵する。蘇州で出版されたと判断する理由については、後述する。前述した『新鐫皇明紀政録』十二巻に、新たに巻首に「我朝聖君嗣統源流」「大明世統徽号」「洪武朝封功臣十二人」「太祖封列侯五十二人」を、巻末には、「録我朝会元三及第人氏総考十三巻」を載せている。李卓吾(贇)の批点を新たに付している。「大明世統徽号」の末尾は「當今萬歲皇帝 萬曆癸酉元年至萬萬年」で結んでいることから、万暦年間に刊行されたのは明らかである。附録の「我朝会元及第人氏総考」では、万暦四十四年丙辰科の会元・状元の錢士昇まで記載していることから、万暦四十四年から四十七年の間に刊行されたと推定される。版式は一二字×二八字で、版心には「李卓吾批點皇明通紀統宗」とある。

なお、我が国では、元禄九年(一六九六)に京都の林九兵衛(文会堂)がこれを翻刻している(図14)。国立国会図書館や大阪府立図書館を始め、多く所蔵している。国立国会図書館所蔵本には、「刻李卓吾批點／皇明合併通紀」という封面があり、貴重である(図15)。「謹依京板」「蘇州閭門」とも記されているから、原刻本の封面をそのまま翻刻したものであろう。附言すれば、批点を加えたという李卓吾の著作が聖人を侮辱したという罪名で王朝によって焼棄処分⁶⁷の命が出されるのは、万暦三十年(一六〇二)閏二月のことであった。しかし万暦末年までにはその処分の効力はすでに失われていた。むし

ろ、李卓吾の名を書名に冠することは、書物の販売戦略の一つとなっていたと考えられる。

万暦三十三年には、陳建撰『皇明資治通紀』十四巻(図16)と卜大有撰『皇明統紀』三巻および卜世昌・屠衡撰『皇明通紀述遺』十二巻からなる『皇明資治通紀全書』が刊行された。尊経閣文庫や湖北省図書館などに所蔵する⁶⁹。陳建撰十四巻部分の構成は、台湾の国家図書館所蔵本と同一であるが、版式は、一〇行×二一字で統一されている。

統紀を撰した卜大有(字、謙夫)は、秀水の人、嘉靖二十六年の進士で、無錫知県、南京礼部主事などを歴任したが、時の宰相に逆らい雲南の尋甸知府に出されて致仕した。兄の大同、弟の大順も進士に挙げられている⁷⁰。統紀三巻のうち、巻上と巻中は世宗肅皇帝を、巻下は穆宗莊皇帝を扱っている。国立公文書館所蔵内閣文庫本の『皇明通紀述遺』には、「萬曆乙巳(三十三年) 孟冬望日 賜進士出身朝列大夫、南京国子監祭酒、前左春坊左庶子兼翰林院侍讀、纂修正史副總裁侍班官、郡人」という紀年と肩書きを付した馮夢禎の序と、屠真(字、隆)の序、卜萬祺の叙を載せている。『全明分省分県刻書考』によれば、『皇明通紀述遺』は浙江嘉興府秀水の人、卜世昌が刊行したものである⁷²。この全書も、石洪運が前言の中で指摘するように卜世昌の手によって刊行されたものである⁷³。

その後、嘉興府秀水県の岳元聲(号、石帆)がこれらを訂合して『皇明資治通紀』三十巻を、おそらく蘇州で家刻本として出版している(図17)。東京都立中央図書館の市村文庫や中国の国家図書館⁷⁴、北京師範大学図書館などに所蔵する。版式は、一〇行×二二字である。

この三十巻本の目録には、「鑄岳石帆先生訂合皇明資治統紀卷目」とあり、「統紀」と略称されていたようである。巻二五から二九までは世宗肅皇帝紀を、巻三〇は穆宗莊皇帝紀を扱っている。「凡例」によれば、『皇明通紀述遺』の記事を年月に基づき、通紀の本文中に繰り入れたという⁽²⁷⁾。岳元聲は万曆十一年の進士で、官は兵部侍郎にまで陞っている⁽²⁸⁾。岳は、万曆後半の時点においてすでに十種を数える刊版された本朝典故に関する諸書の中で、陳建の編輯した通紀が「海内の宗宝」であり、記載が信用でき、是非判断は公正で、文意も簡明流暢であると高く評価している⁽²⁹⁾。

岳元聲は、宋の岳珂の一連の著作を出版したことも知られている⁽³⁰⁾。市村文庫本では、校正を担当した者として各巻首に岳の「門人沈國元」（巻一、二、九、一一、一二、一四、一五、三〇）、「門人仲嘉」（巻三、四）、「門人楊瑞枝」（巻五、七、一三）、「門人陳繼華」（巻八）、「門人夏璋」（巻一〇）の名が見える。このうち嘉興県の沈國元が、のちに書林大来堂を興したことにについては後述する。北京师范大学所蔵本を影印した四庫禁燬叢書本では、すべて校正者を「沈國元」に統一したうえ、肩書きを「門生」から「庠生」に改めている（図18）。ただし、巻二九、巻三〇では、門生のままとなっているのは、改めるのを忘れたためであろう。後刷りと目される北京師範大学所蔵本が出版された時に、版木の所有権が生員となった沈國元に移っていたことが考えられる。

四十八年秋には、万曆帝が崩御するのを待っていたかのように、三十巻本に「神宗顯皇帝紀」を加えた『皇明從信錄』四十巻が、秀水の書林大来堂の沈國元によって刊行された（図19）。本書は、国立

国会図書館、東洋文庫、国立公文書館内閣文庫、東北大学附属図書館所蔵の狩野文庫、北京大学図書館⁽³¹⁾などで収蔵している。現存する各種版本の中では最も数多く残されており、出版部数も多かったと考えられる。この四十巻本には、陳建の「皇明通紀前編序」のほかに、沈國元が書いた「從信錄引」と「從信錄総例」を載せるのみであり、前述の三十巻本を訂合した岳元聲についての言及は無くなっている。おそらく「神宗顯皇帝紀」の編纂は、沈國元の手になるものと思われる。なお、国立公文書館所蔵本や国立国会図書館所蔵本・東洋文庫所蔵本にはいずれも「皇明通紀從信錄」という封面を残しており、「二乙堂」と朱印してあるが、大来堂との関係については現在のところ不明である（図20）。また沈國元は、崇禎二年に泰昌・天啓年間を扱った『両朝從信錄』三十五巻も出版している。東京大学東洋文化研究所、東洋文庫、東京都立中央図書館、台湾の国家図書館⁽³²⁾などで所蔵する。本書には詹事府少詹事翰林学士陳懿典の序文を載せている。台湾の国家図書館所蔵本には封面が残されており、「両朝通紀從信錄」「沈衙原板」「大来堂識」と記している（図21）。

なお、『全明分省分県刻書考』江蘇省書林巻、呉県によれば、天啓年間に蘇州府呉県の蘊古堂から『皇明通紀』二十巻が刊行されたことが知られるものの、その所蔵先は不詳である。

3 建陽での出版

民間の出版業で栄えていた福建の建陽でも、明末に皇明通紀が盛んに出版されている。万曆年間に入って、まず『新鐫校正標題皇明通紀』十巻が出版された。中国の清華大学図書館所蔵本がそれであ

る。巻首に、「皇明通紀凡例」と「国朝名臣総歌」を収めるが、序文を欠いている。版式は一行×二七字で、版心には「皇明通紀大全」とある。これは、南京の摘星楼が出した十巻本をもとにしたものであるう。

三十八年（二六一〇）には、書林安正堂の劉蓮台が『新鐫校正標題皇明通紀』十一巻を出版した（図22）。名古屋市蓬左文庫、東洋文庫、台湾大学図書館で所蔵している。これは、版式と版心ともに前述した十巻本と同様で、これに巻十一に「世宗肅皇帝」「穆宗莊皇帝」部分を増補したもので、同巻にのみ支大倫・吳瑞登の注を加えている。陳建の序・目録・凡例・国朝名臣総歌・採摭書目（一一九種）を付す。序文の末尾の紀年には、「崑／萬曆丙戌歲仲冬之吉／東莞清瀾居士臣陳建稽首頓首謹書／萬曆三十八年重梓」（図23）とあり、「皇明資治典則」の序文で書き換えられていた「萬曆丙戌歲仲冬之吉」の紀年をそのまま踏襲している。

蓬左文庫所蔵本には、「皇明資治通紀大全」と題した封面があり、さらに以下のような宣伝文句を載せている（図24）。

通紀一書は、我が朝の事実を記し列聖の盛績を載せる、誠に万世の龜鑑なり。本堂敬みて求めてこれを刻し、人をして遵守するところを知らしむ。刊するところ精緻なれば、四方の原板と甚だ異なる。海内君子、当に隻目を以てこれを看られよ。謹んで識す。⁸⁴

「刊するところ精緻」の惹句は、陳氏の原刻本その他と比べれば誇大広告の誇りを免れない。蓬左堂文庫本や台湾大学図書館所蔵本の十一巻巻末には刊記はないが、東洋文庫本の十一巻巻末には「書林安

正堂劉蓮台□行」という刊記がある（図25 a b）。安正堂の刊記は余白部分に埋木によって入れたものであろう。

安正堂は、明代建陽劉氏の中でも、最も長期にわたり多くの数量の出版を行った書肆である。⁸⁵ 宣徳四年から万曆三十九年までの一八三年間の長きにわたって、その出版活動が知られる。劉蓮台は、その最晩期の万曆三十年代に出版業に従事していた。

安正堂が十一巻本を出してから二年後の万曆四十年には、同じく建陽の書林余成章（仙源）が陳建撰、袁黃増訂『新鐫鈔評校正標題皇明資治通紀』十二巻を出版した（図26）。東洋文庫、慶応義塾図書館、斯道文庫、中国の国家図書館（旧、北京図書館）、⁸⁷ 北京大学図書館などで所蔵している。陳建の序文、「目録」「凡例」「国朝名臣総歌」「採摭書目総録」（一一一一種）を付す。東洋文庫所蔵本や斯道文庫所蔵本には、いずれも封面があり、「諸名家評註／皇明通紀／金陵原板」とある（図27）。中国の国家図書館本の巻末の蓮牌木記の刊記には、「皇明萬曆壬子歲／閩書林余仙源梓」とある（図28）。仙源は余成章の字で、永慶堂とも称した。目録に、「一紀我／穆宗莊皇帝建元隆慶元年至六年／萬曆皇帝萬々歳」とあることから明らかなように、十巻本に、世宗肅皇帝紀と穆宗莊皇帝紀を万曆年間に増補したものである。巻一一、巻一二は、前述した袁黃が補っている。巻末には「録我朝会元三及第名氏便覽一卷」を付しているが、斯道文庫本には、「萬曆四十一年癸丑科」の会元・狀元として周延儒の名を載せており、万曆四十一年以後に補刻の手を経ていると考えられる。序文末尾には、「崑／萬曆丙戌歲仲冬之吉／東莞清瀾居士臣陳建稽首頓首謹書」とあり、安正堂の『新鐫校正標題皇明通紀』と同様に「皇明資

治典則」の序文で書き換えられていた紀年をそのまま用いている。「凡例」は、摘星樓刊本の『新鐫官板音釋標題皇明通紀』のそれを踏襲している。版式は一二行×二八字で、版心には「鈔評皇明資治通紀」とあり、さきの安正堂の版式一一行×二七字や版心とは明らかに異なる。このことから、ほぼ同じ時期に福建の少なくとも二つの書肆が、競って皇明通紀を出版していたことが判る。

4 天啓・崇禎年間

天啓年間には、『皇明典要』八巻が建陽の書林王渭⁹⁰によって上梓された(図29)。尊経閣文庫や北京師範大学図書館⁹¹で所蔵する。巻七で世宗肅皇帝と穆宗莊皇帝を、巻八で神宗顯皇帝を扱っているが、ダイジェスト版に近い。巻首には、「陳建輯」とあるものの、嘉靖年間を扱う巻七以降は、巻首題に「參訂」者として見える李春培(真州)や王鼎宗(古信)が続けたのであろう。版式は八行×一八字である。なお、関西大学所蔵の内藤文庫本や北京師範大学所蔵本では、巻三以降の巻首題が「皇明紀要」となっている⁹²。その後、崇禎六年には、『皇明紀要』八巻⁹³が同じく書林王渭によって出版された(図30)。これは前述した『皇明典要』と巻数と書林名も同じであることから同一の書と誤解され易いが、皇明紀要には光宗貞皇帝紀と熹宗哲皇帝紀を増補しており、巻毎の編成も異なっている。巻首には、崇禎六年正月の南京吏部尚書南企仲の「張閣老通鑑直解敘」「皇明一統輿地歴代帝王國都」を収めている。

附言すれば、陳建の皇明紀要には三巻本も存在している。東京大学東洋文化研究所の大木文庫に所蔵する『鼎録鍾伯敬訂正皇明紀要』

三巻である。清刻本の呈祥館藏板『資治綱鑑正史大全』の中に収められている。伯敬は、鍾惺⁹⁴の字である。湖広安陸府景陵の人、万曆三十八年の進士。同郷の譚元春とともに竟陵体を広めたことで知られているが、彼の名を冠した書籍が数多く出版されている。「皇明通紀」の封面がある。版式は一二行×二六字で、版心には「昭代紀要」とある。表紙に「大明一統紀」と墨書して洪武年間のみを扱っており、皇明通紀ではなく『皇明啓運録』のダイジェスト版である。未見であるが、吉林省図書館に収蔵する『新鐫鍾伯敬訂正皇明紀要』三巻、明末刻本を重刻したものであろう。

崇禎年間に入ると、『皇明通紀』の続編の出版点数と出版地の広がりが一層顕著となる。この時期に出版された続編は、天啓年間を詳細に記している点が特色で、より同時代史としての側面を強めている。

まず崇禎五年(一六三二)に南京で陳龍可が増訂した『皇明十六朝広彙紀』二十八巻が出版された(図31)。国立公文書館内閣文庫や北京師範大学図書館⁹⁶などで所蔵する。王襄、李康先、鄒德泳⁹⁷、丘西の序文のほか、「列聖諡号」、「引用群書」(七九種)を付す。巻一から巻一三までの各巻首題には、「東莞 陳建 輯／安成 王襄 參／溫陵 陳龍可 訂／古鄞丘西 較」とあるが、巻一四、穆宗莊皇帝以後は、陳建の名が消え王襄や陳龍可らの名のみとなっている。版式は一〇行×二四字で、版心には「皇明広彙紀」または「十六朝広彙紀」とある。版心の下段には「友石居藏板」と刻している。友石居⁹⁸は、万曆末から崇禎年間にかけて活動した南京の書林である。陳龍可については不詳。本書は、巻一八から二八まで十一巻分を充て

た天啓紀がとくに詳しい。

その後、蘇州で『皇明二祖十四宗増補標題評断実紀』二十七巻本が出版された(図32)。国立公文書館内閣文庫、東京大学東洋文化研究所、中国の国家図書館、北京大学図書館などで所蔵する。穆宗肅皇帝までは通紀を、神宗・光宗・熹宗の三朝は、従信録と広彙紀をもとに編集したとしている。巻首に、陳仁錫撰「皇明実紀叙」「総例」「引用群書」(八二種)「頌聖表訣」「皇明列聖事实」「國朝名臣総歌」「目次」のほか、二十七巻巻末に、「文官品職月俸」「武官品職月俸」「文官服色歌」「武官服色歌」「聖諱檢字用簡」を付す。版式は、一行×二六字で、版心には「皇明実紀」とある。国立公文書館所蔵内閣文庫本にある封面は、朱墨の精巧な二色刷りで、「丘瓊山鑒定／皇明實紀／遵金陵繡梓」とある(図33)。巻一の巻首題には、「瓊山 丘濬 鑒定」とあり、この丘瓊山とは丘濬のこととも考えられるが、『大学衍義補』の著者として知られる著名な丘濬は、景泰五年の進士、弘治八年(一四九五年)の没年で、陳建の著作を鑒定することはありえない。巻一七から巻二四までの巻首題に「溫陵 臣陳龍可 彙輯／瓊山 臣 丘爾穀 鑒定」と見える丘爾穀のことである。丘爾穀は、康熙『瓊山県志』巻七、人物志・郷挙によれば、丙午科(万曆三十四年)の挙人である。また「丘爾穀、文莊七代孫、懿之兄、貴県知県、為人孝友温恭、博涉經史」とあり、丘濬(文莊)の七代孫にあたり、貴県知県に任官した。

なお、この実紀は、当初二十三巻本として出版されたようである。台湾の国家図書館には、『皇明二祖十四宗増補標題評断通紀』二十三巻を所蔵する。版式は、同じく一行×二六字であるが、太祖から

光宗までを扱い、熹宗部分を含んでいない。巻二三の巻末には「皇明実紀二十三巻終」とあるほか、巻四巻首題の「通紀」部分には、明らかに埋木の跡を看取できる(図34)。巻首、巻末に付されているものは二十七巻本と同じであるが、「聖諱檢字用簡」のみが欠けている。

実紀二十七巻は、他の書林からも版を重ねている。「通紀輯録」と封面が附された『皇明二祖十四宗増補標題評断通紀』二十七巻がそれである(図35)。版式は一行×二六字で実紀と同じであるが、版心には「皇明通紀」とある。巻首題の「通紀」部分には、二十三巻本と同様に埋木の跡を看取できる。陳仁錫の「皇明通紀輯録序」と陳建の「皇明通紀原序」「引用群書」(八一種)「頌聖表訣」「皇明列聖事实」「國朝名臣総歌」「文官品職月俸」「武官品職月俸」を付す。通紀二十七巻本には、二種の封面が残されており、少なくとも二つの書林から出版されたことが確認される。その一つは、慶応義塾大学図書館所蔵本で、封面には「丘瓊山鑒定／通紀輯録／書林朱思園梓」とある(図36)。朱思園は、『全明分省分県刻書考』にも見えず、不詳である。もう一つは、国立公文書館所蔵の内閣文庫本で、封面には「丘瓊山先生鑒定／通紀輯録／呉門五車樓藏板」とある。五車樓についても不詳である。二つの書林の出版の前後関係は明らかではない。これらのほかに、『中国古籍善本書目・史部』によれば、明末崇禎年間に出された天徳堂刻本が上海図書館と中山図書館に所蔵されているも、未見である。

崇禎九年には、杭州の高汝斌が皇明通紀を増訂した『皇明通紀法伝全録』五十巻が出ている(図37)。東洋文庫、中国の国家図書館、

北京大学図書館、浙江図書館などで所蔵する。五十巻本は、太祖高皇帝紀から武宗毅皇帝までの十朝を扱った『皇明通紀法伝録』二十八巻と世宗と穆宗の両朝紀を扱った『皇明法伝録嘉隆紀』六巻、および神宗・光宗・熹宗紀を続けた『皇明統紀三朝法伝全録』十六巻からなる。文徳翼、呉禎、高汝栻の序文と、陳建の「皇明通紀前編序」を付している。「引用群書」（一九六種）には、「十六朝広彙記」や「皇明紀要」の書名も見える。増訂を行った高汝栻については、その序文にも「西湖逸民」とあるにのみで不詳。版式は、一〇行×二一字。東洋文庫所蔵の『皇明法伝録嘉隆紀』と『皇明統紀三朝法伝全録』にはいずれも封面が残されており、「嘉靖隆慶／両朝法傳録／崇文堂藏板」「萬曆泰昌天啓／三朝法傳録／崇文堂藏板」とあることから、書林崇文堂から刊行されたことが知られる。しかし崇文堂については、『全明分省分県刻書考』にもその名は見えず、詳かではない。

十一年には、南京では『皇明通紀前編』二十七巻 続編十八巻が出版された。陳建の皇明通紀前編二十七巻に董其昌が校訂を加え、さらに嘉靖・隆慶から天啓年間までの五朝を董が補訂した続編十八巻を合わせて刊行したものである。北京師範大学図書館や香港中央図書館に所蔵する。版式は、一〇行×二二字。董其昌は、松江府華亭の人、万曆十七年の進士で、万曆年間の本朝正史の編纂に参加したほか、天啓の初め『神宗実録』の編集にも関与している。北京師範大学図書館蔵本には、崇禎十一年の陳繼儒の序文「皇明通紀全書序」がある。

同じく天啓年間までを扱った『皇明通紀集要』六十巻も出された

(図38)。東洋文庫、北京大学図書館、ハーバード大学燕京図書館等で所蔵している。版式は一〇行×二〇字。江旭奇の序・凡例・目録を付す。本書は、巻四二から巻六〇までの熹宗哲皇帝紀がかなり詳しい。補訂した江旭奇は、徽州府婺源の人。諸生から国子監生となり、四川潼川府の安岳県丞を勤めた。ほかに『漢魏春秋』や『尚書伝翼』の著作がある。

崇禎十二年には、松江府華亭の寶日堂が『皇明通紀輯要』二十四巻を出版した。北京大学図書館や南京図書館で所蔵するが、未見。ただし、東洋文庫所蔵本・ソウル大学奎章閣・関西大学図書館内藤文庫には、朝鮮古活字の大字本を所蔵している(図39)。洪武から天啓までの十六朝を扱う。陳建の皇明通紀をもとに餘姚の孫鑛(号は月峰、万曆二年甲戌科の会試第二)が校訂し、十四巻の世宗肅皇帝紀以降は、「豫章 黃端伯訂閱／舜水 馬晉允編輯」とあり、孫と同じく餘姚の馬晉允が増補している。版式は、一〇行×一八字。陳建の「皇明通紀原序」に加えて、馬晉允の序と凡例を載せている。凡例の中で、『皇明從信錄』『皇明通紀法伝録』、江旭奇の『皇明通紀集要』に言及している。孟森は、馬晉允が増補した本書の成立は、明代ではないとしている。なるほど馬は、明朝滅亡後は清朝に仕え、順治十五年戊戌科の進士となり庶吉士をへて翰林院編修を授かり、官位は侍読まで陞った。清初の『明史』編纂にも関わったと推定される。しかしながら、馬晉允の序文末尾に「崇禎己卯(十二年)秋月、臣馬晉允謹書於敬日堂」(図40)とあるように、彼が野史としての『皇明通紀輯要』を編輯して坊刻から出版したのは、明朝最末期のことであった。寶日堂は、万曆三十二年の進士、張簾の室名であ

る。張鼎は、南京吏部右侍郎兼詹事府詹事となり、万暦年間に『皇明文準』八巻を自ら編輯刊行している^⑪。

以上の考察で明らかになったように、陳建の編纂した皇明通紀は、その後も明朝では書名を変え、増補・節略の手が加えられて出版され続けたのであり、関連する諸本は、現時点での調査でも二十種を上回る。その点では、明王朝による禁書指定の効力はほとんど持続しなかったと言えるよう^⑫。以上のことは、明末の沈徳符による、次のような指摘からも明らかである。

按ずるに、此の書は俚浅舛訛一ならずして足る、但だ板行われること已に久し、向來俗儒淺学、多くその略を剽^{かす}め、以て博洽なるを誇る。ここに至り始めて焚毀を命ぜらる、而るに海内これを伝誦すること故の如きなり。近日復た重刻して世に行う者あり。其の精工なること前に数倍、乃ち蕪陋の談は人に入り易きこと此くの如きを知る^⑬。

禁書に指定されてからも、以前と同様に読まれたうえに、近頃ではさらに精巧な版本まで出回る始末であったという。沈徳符は万暦四十六年の挙人で、野獲編を執筆していたのは万暦三十年代である^⑭。

また崇禎年間に出版された『皇明通紀輯要』に収める馬晋允「皇明通紀凡例」には、明末における皇明通紀の普及状況について以下のような記述が見える。

皇明通紀の坊刻十數種有り、洪武より起し正徳に至るまでは大約多く陳東莞を宗とす、これを綱目するものは従信録なり。これを増訂するものは法伝録なり。今二書、皆世に行わる、然れ

ども従信（録）は事失実多し、法伝（録）は文俗にして未だ調わず、年拘し時に怯す、勢として衆を憚り私を蔽い、遂に黑白混淆、淑慝紛乱す。世に識有る者必ず穢史を以てこれを目す^⑮。

坊刻による皇明通紀の出版は、馬晋允が確認しているもの、だけでも十數種が出版されていたという。これらのうち、『皇明従信録』と『皇明法伝録』がその代表として挙げられている。「失実」「文俗」などの点でこれら二書に対しての「穢史」という識者の認識を紹介している。しかし、新たに馬晋允によつて増訂出版される『皇明通紀輯要』も、「野史」という点では、本質的に変わりはない。万暦年間の「本朝正史」編纂事業が頓挫し、また実録が広く流布していない中で、多くの読者を獲得し続けていたのが民間の坊刻から次々と出版される皇明通紀とその続編であった^⑯。これらの続編のあいだでも、それぞれの優劣が競い合っていたのである。

結びにかえて

『資治通鑑』に倣ったという陳建の皇明資治通紀の編纂意図は、前号で明らかにしたように経世の志にあった。また前述した『皇明通紀輯要』の編者馬晋允も、その序文「皇明通紀序」の中で、以下のように編纂意図を述べている。

晋允は史才には非ず、また修史の職も無し、偶たま本朝編年紀事の書を取り、その次序を攷し、その繁雑を芟^そぎ、勝国至正の年より熹廟升遐の日に至るまで、巻を為ること二十有四あり。その間の詳略・信疑、敢えて臆に馮^よらず。独り臣僚邪正の故に

において、微文を事とする無し。亦たこの書を観る者をして、某や徳望隆んなり、某や猷略著わる、某は忠にして患に罹るも終に表卹を蒙むる、某は愚にして寵榮し卒に削奪せらるに至る。生歿褒議の間、邪正の繇以て分つなり。正人と為るを学び、邪党と為るを戒しむ。以て聖明を翊賛し、大難を摧夷するにおいて、豈に惟だに国家の禎はまた孔子の徒のみならんや。然れども孔子は衰世に処す、而して吾が党は盛治を覩る、故に春秋猶お並びに罪を知ると言うがごとし。^⑪

馬晋允もまた修史の任にあつたわけではなかったが、元末至正年間から天啓年間にいたるまでの本朝（明朝）の歴史を叙述しようとしたのは、正邪の謀を明らかにし、聖明の世を翼賛して大難を打ち碎き平らげるためであるという。そのうえで、「草茅の臣、時忌を識らず、その大端を挙ぐるれば、闕漏するところ多し。要は是非において帰する有り、芻言の採る可くんば、議を当世に取ると雖も、惜しむる勿きところなり」と著述にあたつての気概を表白している。陳建と馬晋允に共通してみられるのは、やはり一介の在野の士といえども強く意識していた経世の志であつた。

とはいえ、版を重ねて出された皇明通紀とその続編が明末の社会で広く受容された理由については、編纂者の意図とは一応切り離して検討する必要がある。つとに孟森は、陳建の『皇明通紀』が科挙を受験する士人たちが試験場で課される時務策に備えるための書であつたと指摘している。^⑫

前号の註（11）でも触れたように、摘星楼刻本『新鐫官板音釋標題皇明通紀』に載せる「凡例」では、嘉靖原刻本の「皇明通紀凡例」

の第七項目のみ以下ような別の一文に替えている。

一つ、韓子云うならく、「人は古今に通ぜず、馬牛にして襟裾す」と。今の学者博古或いはこれ有らん、而して今に通ずるは殆んど鮮なし、群り集まり禁れて統無きを以て、考索惟れ艱きなり。今繁を芟き会要し、統べて此の紀を為る。庶わくは士子今の略に通ずるに便ならんことを、工拙は計るに暇あらずとか云う。^⑬

南京の摘星楼が入れ替えた凡例の一項に記された「多少難ではあるものの読書人が当世に通ずるため虎の巻」という触れ込みは、まさに明初以来国子監が置かれ、士人たちが蟬集する副都南京の書肆ならではの販売戦略を示している。

また書林大来堂の沈國元によつて刊行された『皇明從信錄』（国立国会図書館所蔵本）の封面に載せる坊刻の広告文も、こうした販売戦略をよりストレートに表現している。

前刻、賈人稿を匿すに因り、字句訛多し。茲に復た力めて前弊を矯し、増訂允当、写刻は端工なり、加るに万曆盛事を以てす。真に攷政の金鏡、後場の笥庫なり。^⑭

「攷政之金鏡」、すなわち政治の在り方を洞察する鑑と並んで挙げられている「後場の笥庫」とは、試験場で役立つ宝庫の意であろう。坊刻は封面で、科挙の受験参考書、すなわち挙業書としても読まれるべきことを宣伝していた。^⑮ 比較的安価で知られる建陽の書林で、すでに明らかにしたように皇明通紀が版を重ねたのも、そうした理由からであろう。

さらに崇禎年間になって出版された『皇明十六朝広彙紀』を始め

とする続編では、とりわけ天啓年間の記述に多くの紙幅を割くようになる。あらためて言うまでもなく、天啓・崇禎年間は、魏忠賢と東林党の対立に示されるような党派的政治の先鋭化した時代であったから、この時期における続編の出版は、かかる政治的対立を反映していたと推測される。ここでは、その可能性を指摘するのみに留めてひとまず筆を擱きたい。

註

(43) 『皇明歷朝資治通紀』四十二卷本、[皇明通紀凡例]、

a 建輯通紀將就梓、或傲曰、我朝國史實錄、皆絨之蘭臺石室、惟翰苑諸公僅僅見之、不傳于天下也。百餘年來、學士大夫無敢議及此者。子草莽、公麼職非太史、冒爾欲爲而欲傳之、古有其倫耶。否且涉不韙。
b 愚應曰、稽古有之矣。班固作漢書、坐事沒未就。和帝詔固女弟曹壽妻昭踵而成之。孫盛作晉春秋直書時事、雖桓溫之權不悚焉。宋知雙流縣李燾初繼司馬光作宋百官表、偏求正史實錄、旁采家集野史、起建隆迄靖康、凡九十卷。翰林學士周麟之言于高宗皇帝、詔給筆札錄付史館。既而燾復做資治通鑑例、槩括前書、爲續通鑑長編。自上下于朝。三氏之作、皆當國家中葉、當時朝廷皆樂觀其成、未嘗以爲嫌也。區區通紀殆三氏之遺矩乎。
c 且我朝國史實錄之不傳于天下也、非不欲傳也。以卷帙繁多、謄寫惟艱、欲傳而不易也。以禁閣嚴遠、外人罕至、欲傳而不能也。
e 雖然亦有傳之者矣。如大明會典・皇明政要・五倫書・開國功臣錄・殿閣詞林記・雙槐歲抄・餘冬序錄所載、皆無非本之實錄也。如三朝聖諭錄・天順日錄・名臣言行錄・經濟錄・守溪長語・孤樹哀談之類、則又無非與國史實錄相爲表裏、而猶或足以補國史之所未備者也。是諸書固已播之天下、但以各爲義例、散出無統、令學者艱于考索貫通耳。
f 故今此紀特做通鑑長編之遺、起自國初迄于正德、芟繁會要、萃次成編。于敘述鋪張我祖宗列朝

之俊德神功鴻休盛烈、訐謏遠猷良法美意、以昭示天下來世。而大意則欲奕世聖子神孫、繩祖武監成憲、振因循玩愒之弊、爲先甲後甲之圖、以保鴻業於億萬斯年之永、斯固體國愛君、憂時察治、君子之所欲聞、而何不韙之有。
g 或曰、李燾長編嘗上之朝矣。子盍併步其武耶。曰仕止殊也。燾之上之朝也、以當仕也。愚家食久矣、身既隱矣。焉用文之。且年垂耳順、衰病之餘、首丘漫漫、尚奚以爲、尚奚以爲、聊記其語、以諗觀者。

この凡例は、国立公文書館所蔵内閣文庫本『新鐫官板音釋標題皇明通紀』にも収められているが、文字の異同と誤字が間々見られる。

(44) 嘉靖帝が皇史宬の建設を命じたのは、嘉靖十三年七月のことで十五年七月に完成した。『明世宗實錄』卷一六五、嘉靖十三年七月丁丑、卷一八九、嘉靖十五年七月戊寅の条。

(45) 『晋書』卷八二、孫盛伝に、「著魏氏春秋・晉陽秋、并造詩賦論難復數十篇。晉陽秋詞直而理正、咸稱良史焉。」とある。

(46) 以上の書名の著者名等は、四十二卷本に載せる「採摭書目」などにより補った。

(47) 清初の黄虞稷『千頃堂書目』（翟鳳起・潘景鄭整理、上海古籍出版社、二〇〇一年）にも、この版本は著録されていない。

(48) 杜信孚『明代版刻綜録』第四卷、江蘇広陵古籍刻印社、一九八三年には、「新刊校正皇明資治通紀十四卷 明陳建撰 明嘉靖三十四年陳建刊」と著録している。その所蔵先を明記されていないが、おそらくこの国家図書館所蔵本のことであろう。ただし、これが嘉靖原刻本でないことは先に考察を加えた。

(49) 卷一に「粵濱逸史清澗釣叟臣東莞陳建輯著／金陵 摘星樓 繡梓」とある。ただし、十卷末刊記には「陳建著刊」とあり家刻本と解される表現もあるが、ここでは前者の記載に従う。『東京大学総合図書館漢籍目録』二〇〇〇年、一二五頁で「萬曆中東莞陳氏據嘉靖三十四年金陵摘星樓刊本重刊」としているのは誤りである。

(50) 『関西大学所蔵内藤文庫漢籍古刊鈔目録』四九頁、関西大学図書館、一九八六年。

- (51) 磯部彰『西遊記』形成史の研究』創文社、一九九三年、三九〇頁には、封面に「官板」を標榜した刊本として、『医学綱目』（内閣文庫蔵本）、『新刻出像官板大字西遊記』（台湾故宫博物院圖書館蔵本・天理図書館蔵本）、『重刻校正増補官板武経總要』（加賀市立図書館聖藩文庫蔵本）の三種を紹介している。前者二例は金陵南京の世徳堂（唐氏）、後者一例も同じく金陵の富春堂から出版されている。皇明通紀十巻本もまた南京の坊刻であり、南京の坊刻がよく用いたことが判る。
- (52) 北京大学図書館所蔵本や天理図書館所蔵本にも、同様な「官板皇明通紀」の題簽を付綴している。『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』一九九八年、二〇四頁参照。
- (53) 『明神宗実録』卷二、隆慶六年六月甲子、上即位。（中略）。出御中極殿朝百官、改明年爲萬曆元年、大赦。詔曰（中略）其以明年爲萬曆元年、與民更始。所有合行事宜、開列于後（下略）。
- (54) 崇禎『烏程県志』卷七、凌稚隆、號磊泉。承先世家學、篤於典故、所輯有史記・漢書評林、左傳評林測義、五車罰瑞等行世。
- (55) 『全明分省分県刻書考』浙江省卷、吳興県。
- (56) 崇禎『烏程県志』卷六、科第、丙辰、凌迪知。
- (57) 封面のみ新たに付け加えられた可能性については、埼玉大学の大塚秀高氏より「教示を得た」。
- (58) 当該書の閲覧に際しては、ソウル大学の呉金成教授の協力を得た。
- (59) ハーバード大学燕京図書館所蔵本は十巻本で統紀三巻はない。沈津著『美国哈佛大学哈佛燕京图书馆中文善本書誌』上海辞書出版社、一九九九年、一三四頁によれば、「此書應有《續紀》三卷、今佚」とある。
- (60) 前註(59) 沈津著書によれば、南京図書館に所蔵する重刻校正増補十巻本は、一四行×三〇字でこれに近いが、未見である。
- (61) 杜信孚『明代版刻綜録』第四卷、江蘇広陵古籍刻印社、一九八三年には、「新刊校正皇明資治通紀十四卷 明陳建撰 明嘉靖三十四年陳建刊」と著録している。その所蔵先を明記していないが、おそらくこの

- 国家図書館所蔵本のことであろう。ただし、これが嘉靖原刻本でないことは先に考察を加えた。
- (62) 『中国古籍善本書目・史部』上海古籍出版社、一九九一年、一五九頁参照。
- (63) 『中国人民大学图书馆古籍善本書目』同古籍整理研究所編、中国人民大学出版社、一九九一年、三九頁。
- (64) 卷十一の巻頭には、「浙歸田逸叟臣袁黄補著」とある。袁了凡については、奥崎裕司『中国郷紳地主の研究』第二章 袁了凡伝、汲古書院、一九七八年参照。なお、同書第三章 袁氏の思想と著書の中で、袁黄の著書として六九番目に「通紀統宗 袁黄・ト大有等輯」が掲げられているが、後述する『新鐫李卓吾先生増補批点皇明正統合併通紀統宗』のことである。
- (65) 一九九七年に刊行された台湾の国家図書館編印『国家図書館善本書志初稿』史部（一）編年類、一五九頁には「明末葉坊刊本」と注記している。
- (66) 前註(59)の沈津著『美国哈佛大学哈佛燕京图书馆中文善本書志』
- (67) 『明神宗実録』卷三六九、万曆三十年閏二月乙卯、禮科都給事中張問達疏劾李贊、（中略）得旨、李贊敢倡亂道惑世誣民、便令廠衛・五城、嚴拿治罪。其書籍已刊未刊者、令所在官司盡擗燒燬、不許存留。如有徒黨曲庇私藏、該科及各有司訪參奏來、並治罪。已而贊逮至、懼罪不食死。
- (68) 京都大学人文科学研究所にも、この『皇明統紀』一帙を所蔵している。
- (69) 中国公共図書館古籍文献珍本匯刊所収の『皇明資治通紀三種』中華全国図書館文献縮微復制中心、一九九七年は、湖北省図書館所蔵本の影印である。
- (70) 万曆『秀水県志』卷五、選舉・科第、および卷六、人物・宦績、ト大同伝。
- (71) 台北の広文書局が一九七二年に影印した『皇明通紀述遺』は、この万曆刊本である。

(72) 『全明分省分県刻書考』 浙江省卷、秀水県・ト世昌に、「皇明通紀述遺、(中略)該書書衣刻ト世昌識語八行、稱「間與同志屠生輩、參質疑信、積久成帙、付之剞劂。」云云」とある。

(73) 註(2) 前掲の石洪運「皇明資治通紀三種影印 前言」参照。

(74) 『全明分省分県刻書考』 浙江省卷、嘉興県では、大來堂(沈國元)の刻書として「皇明資治通紀三十卷、明陳建編、明萬歴浙江省嘉興縣書林沈國元大來堂刊本」を掲げている。しかし東京都立中央図書館所蔵の市村文庫本では、「校正」者に沈國元の名が載せられているものの、刻書者の確認は取れてない。『北京大学図書館蔵古籍善本書目』では、「明末蘇州刻本」としているのは、卷之一、第一葉の版心に「吳門姚可達書」とあるのに基づいたものであろう。

(75) 北京図書館所蔵の三十巻本には隆慶六年までの記事を含むことから、『北京図書館古籍善本書目』一九八七年、二九〇頁で、これを「明嘉靖内府刻本」としているのは誤りである。

(76) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明資治通紀』三十巻本は、北京師範大学図書館所蔵本を影印している。

(77) 『皇明資治通紀』凡例、

一 編合、舊本正編之外、卷各有述遺、其文每涉繁蕪可厭。抑且同是歲月、而令人前後翻閱尋索、不得快一時之觀、用是稍刪潤其事、因其年月而編入之。覽者庶幾稱便焉。

(78) 崇禎『嘉興縣志』卷二三、人物志・鄉達、岳元聲伝。

(79) 『皇明資治通紀』凡例、

一 因述、皇明典故諸書垂刻者、無慮數十種、而獨東莞陳公所輯通紀、爲海内宗寶、詎非載錄近信、是非近公、文義近簡暢歟。故茲刻多仍原本、無敢師心刪削。

(80) 繆咏禾『明代出版史稿』江蘇人民出版社、二〇〇〇年の第一四、明代出版人物。『全明分省分県刻書考』浙江省卷、嘉興県。

(81) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明從信錄』四十巻本は、北京図書館所蔵本を影印している。

(82) 四庫禁燬書叢刊所収の『兩朝從信錄』三十五巻は、北京図書館所蔵

本を影印している。また『統修四庫全書』にも、上海図書館所蔵本の影印本が収められている。

(83) 清華大学図書館所蔵本には、「六合徐氏孫麒珍藏書畫印」、「孫麒氏使東所得」、「上條氏家藏圖書」の藏書印が押されている。孫麒は、清末の徐廌の子承祖の字で、第三代の駐日公使を勤める傍ら、古書蒐集に熱意を燃やしたというから、日本に舶載されていたものが、彼によって中国に買い戻されたものであろう。陳捷『明治前期日中學術交流の研究』汲古書院、二〇〇三年の第二章 清国公使館の訪書活動参照。ただ「上條氏家藏圖書」の藏書印は、渡辺守邦・後藤憲二編『新編藏書印譜』日本書誌学大系七九、青裳堂書店、二〇〇一年にも収載されておらず、不詳である。

(84) 『新録校正標題皇明通紀』封面、

通紀一書記我朝之事實、載列聖之盛績、誠萬世之龜鑑也。本堂敬求而刻之、使人知所遵守焉。所刊精緻、與四方原板甚異。海内君子當以隻目看之。 謹識。

(85) なお、『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』一九七五年の三三頁では、「萬曆三十八年據萬曆十四年序刊皇明資治通紀大全重刊」と記しているが、萬曆十四年序をもつ「皇明資治通紀大全」の存在は今のところ確認できず、本文に述べたように『皇明資治通紀』をもとにしたと考えられる。

(86) 謝水順・李珽『福建古代刻書』福建人民出版社、一九九七年。ただし、該書に掲げる「劉氏安正堂刻書一覽表」には、この『新録校正標題皇明通紀』十一巻を載せていない。

(87) 中国の国家図書館所蔵本の巻一巻首題と巻末刊記の書影が、周心慧主編『明代版刻図釈』第二冊、学苑出版社、一九九八年、四〇一、四〇二頁に収載されている。また勝村哲也編『中国版刻図録』朋友書店、一九八三年覆刊、図版四四九・四五〇にも同じ書影を載せている。原本は、北京図書館編訂本で文物出版社から一九六一年に出版された。

(88) ただし、北京大学図書館本は、十一巻本である。

(89) この永慶堂が萬曆二十二年に刊行した陳建撰『鵞品隲皇明資治紀鈔』十巻が広東の中山図書館に収められているが、未見。

- (90) 『全明分省分県刻書考』 福建省卷、建陽県に、「王渭 皇明典要八卷 明陳建撰、萬歴福建省建陽書林王渭刊本」とある。ただし、本文で述べたように「神宗顯皇帝」部分をも扱っていることから、「萬歴」刊本とするのはやや問題がある。
- (91) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明典要』は、北京師範大学図書館所蔵本を影印している。
- (92) 『閩西大学所蔵内藤文庫漢籍古刊古鈔目錄』 閩西大学図書館、一九八六年、五〇頁。
- (93) 王雲五の景印岫廬現藏罕傳善本叢刊に収める台北商務印書館影印本『皇明紀要』三冊本は、崇禎六年刊本を用いたとしている。
- (94) 『明史』卷二八八、文苑伝四。
- (95) 遼寧省図書館・吉林省図書館・黒龍江省図書館編『東北地区古籍線裝書聯合目錄』 遼海出版社、二〇〇三年。
- (96) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明十六朝広彙紀』は、北京師範大学図書館所蔵本を影印している。
- (97) 『明史』卷二八三、鄒守益附伝。江西の吉安府安福県の人、万曆十四年進士である。魏忠賢の生祠建設に反対したこと知られる。
- (98) 『全明分省分県刻書考』 江蘇省書林卷、金陵。
- (99) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明二祖十四宗增補標題評斷実紀』は、北京大学図書館所蔵本を影印している。
- (100) 「皇明実紀総例」、
 一是録、即東莞傲司馬資治、自洪（武）永（樂）迄嘉（靖）隆（慶）、闡揚皆關大政、更參從信（録）・廣彙（紀）、增補三朝大全、俱二祖十四宗。嘉言善政、昭彰史冊。問如細故煩文、雖工弗録。
- (101) 上海図書館所蔵本は、卷十三（二葉のみ）と卷十四（七葉）、卷十五からなる残欠本である。
- (102) 『皇明通紀法伝全録』高汝栻「皇明法伝序」、
 是以陳東筦編其要、爲皇明通紀若干卷、而臣栻因增訂之、爲法傳録。
- (103) 続修四庫全書所収の『皇明通紀法伝全録』は、浙江図書館所蔵本を影印している。
- (104) 井上進編『三重県公藏漢籍目錄』一九九六年、四〇頁には、桑名市立図書館秋山文庫所蔵の二十八卷本についての解説がある。
- (105) 香港中文大学図書館系統編『香港中文大学図書館古籍善本書録』中文大学出版社、一九九九年。
- (106) 『明史』卷二八八、文苑伝四、董其昌伝、「天啓二年擢本寺卿、兼侍讀學士。時修神宗實録、命往南方採輯先朝章疏及遺事、其昌廣搜博徵、録成三百本。」「万曆起居注」万曆二十二年三月十二日の条。
- (107) 四庫禁燬書叢刊所収の『皇明通紀集要』は、北京大学図書館所蔵本を影印している。
- (108) 『江南通志』卷一六四、人物・儒林二、徽州府「江旭奇、字舜升、婺源人。補諸生入太學。（中略）仕爲安岳丞。所著有續皇明通紀、筆花齋集、漢魏春秋等書。朱彝尊『經義考』卷九二、書二一。
- (109) 孟森「書明史鈔略」「明清史論著集刊」上冊、中華書局、一九五九年。傅玉璋・傅王「明清史学史」安徽大学出版社、二〇〇三年も、その成書を明代ではないとしたうえで、清初には禁書の取締りがまだ緩やかであったので、遼東関係の内容も詳しく記することができたと誤りを重ねている。
- (110) 朱汝珍『詞林輯略』卷一、順治十五年戊戌科、馬晋允。
- (111) 『全明分省分県刻書考』上海市卷、華亭県も、宝日堂が出版した『皇明通紀輯要』二十四卷について、「明陳建輯、馬晉允增訂、明崇禎華亭縣張鼎刊本」と注記している。
- (112) 明朝滅亡後、清朝が成立してからも、陳建の通紀を受け継ぎ南明政權までを新たに含めた歴史書が出版され続けた。清初刻本の王世貞撰・（清）王汝南補『新刻明朝通紀会纂』七卷（四庫禁燬書叢刊所収山東図書館所蔵本影印）や順治刊本の鍾惺撰・（清）王汝南補『明紀編年』十二卷（国立国会図書館所蔵本）などである。これらについても別に考察を加えたい。
- (113) 『万曆野獲編』卷二五、著述、「焚通紀」、
 按、此書俚淺舛訛不一而足、但板行已久、向來俗儒淺學多剽其略、以誇博洽。至是始命焚毀、而海內之傳誦如故也。近日復重刻行世者。

圖6 『新鐫官板音釋標題皇明通紀』卷十卷末刊記（關西大學圖書館所藏內藤文庫本）



圖7 『新鐫官板音釋標題皇明通紀』封面（關西大學圖書館所藏內藤文庫本）



圖8 『重刻校正增補皇明資治典則』卷一（國立國會圖書館所藏本）

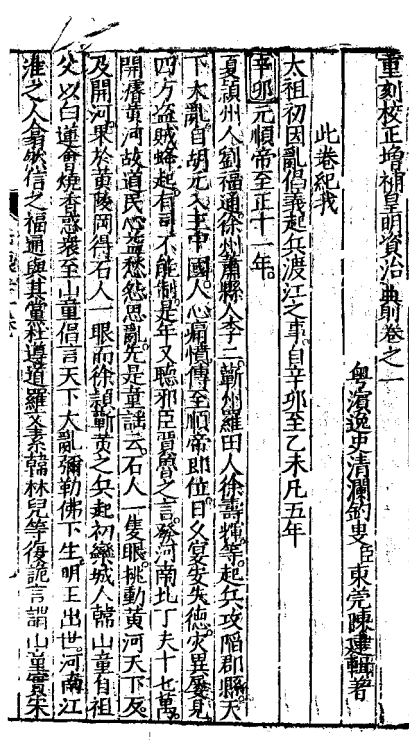


圖9 『重刻校正增補皇明資治典則』封面（國立國會圖書館所藏本）



図14 『新鍔李卓吾先生増補批点皇明正統合併通紀統宗』 卷末刊記
(国立国会図書館所蔵、元禄九年京都林九兵衛刊本)

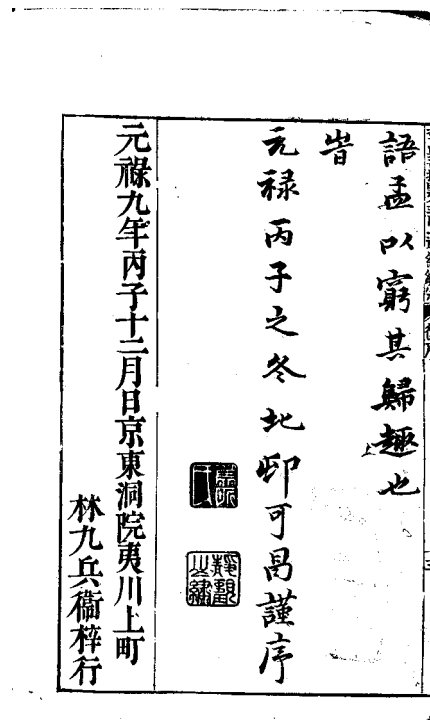


図15 『新鍔李卓吾先生増補批点皇明正統合併通紀統宗』 封面(国立国会図書館所蔵、元禄九年京都林九兵衛翻刻本)

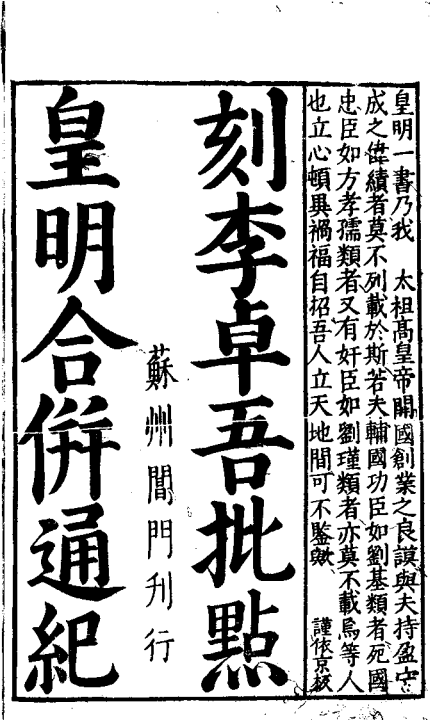


図16 『皇明資治通紀』 十四卷本の卷一(中国公共図書館古籍文献珍本匯刊所収、湖北省図書館所蔵本影印)

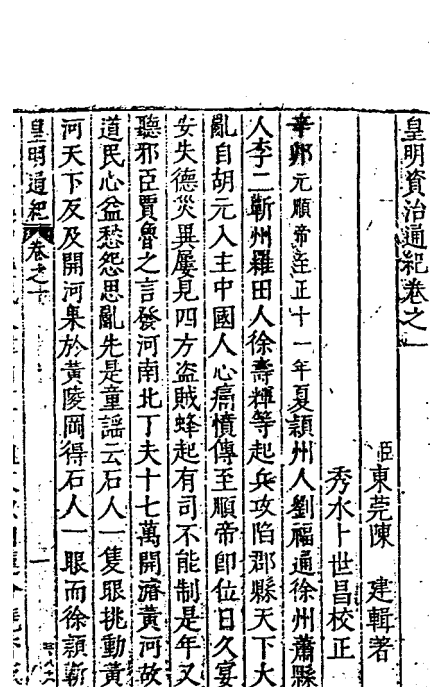


図17 『皇明資治通紀』 三十卷本の卷一(東京都立中央図書館所蔵市村文庫本)

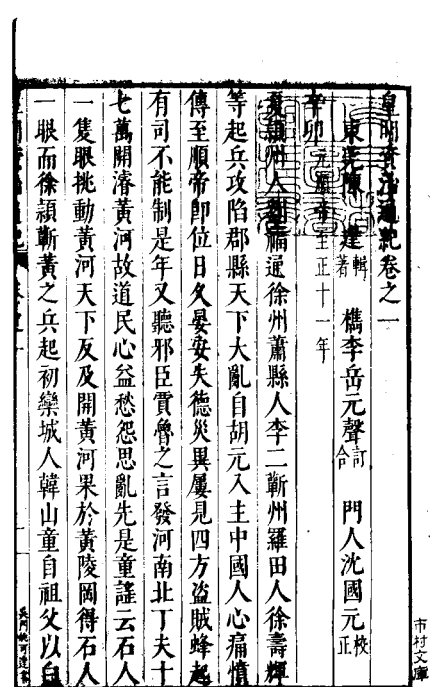


図18 『皇明資治通紀』三十巻本の巻一三（四庫禁燬書叢刊所収、東京師範大学図書館所蔵本影印）

皇明資治通紀卷之十三
 東莞臣陳建撰
 合訂 庠生沈國元校
 巴丑 永樂七年
 正月遣中官鄭和領兵航海通西南夷封海神宋靈惠夫人林氏爲護國庇民妙靈昭應弘仁普濟天妃建祠于京師之儀鳳門祀之
 丘氏滿曰永樂初命中貴鄭和巨艦各福建之長樂五虎門航大海西南行抵林邑天自林邑正南行入晝安港滿刺加由是而達西洋故至大國分設偏往支國
 阿丹榜葛剌忽魯謀蘇門答剌等處或曰亦爲前建文二月車駕發京師巡幸北京命皇太子監國庶務惟文武除拜四夷朝貢邊境調發上請行在餘常務悉啓聞處
 皇明資治通紀 卷之十三

図19 『皇明從信錄』巻一（東北大学附属図書館所蔵狩野文庫本）

皇明從信錄卷一
 東莞 陳建輯 秀水 沈國元訂
 壬辰 元至正十二年
 高皇帝起兵濠州 帝之先江東句容朱家巷人 皇祖
 熙祖始渡淮家泗州 皇考仁祖淳皇帝與 太后陳氏
 徙濠之西鄉後遷太平鄉生四子長南昌王次盱眙王次
 臨淮王 上季子也先是 陳太后夢一朱衣神佩藥如
 九輝輝有光吞之既覺異香襲體遂娠焉及旦有光燭天
 照耀千里異香經宿不散時元大曆元年戊辰九月十八
 日也取河水澡浴忽有紅羅浮來遂取衣之故所居名紅

図20 『皇明從信錄』封面（国立公文書館所蔵内閣文庫本）

皇明通紀從
 信錄
 前朝因災人曰... 萬曆盛車凡... 之金鏡使樂之節重也

図21 『兩朝從信錄』封面（台湾の国家図書館所蔵本）

兩朝通紀從
 信錄
 皇明從信錄名已見於唐封敕書... 聖作之其奇技茲編之幾定今... 而限是非叙典章以建功... 大來堂識

図 25 b 『新鐙鈔評校正標題皇明通紀』 卷末刊記（東洋文庫所蔵本）



図 26 『新鐙鈔評校正標題皇明資治通紀』 卷一（東洋文庫所蔵本）

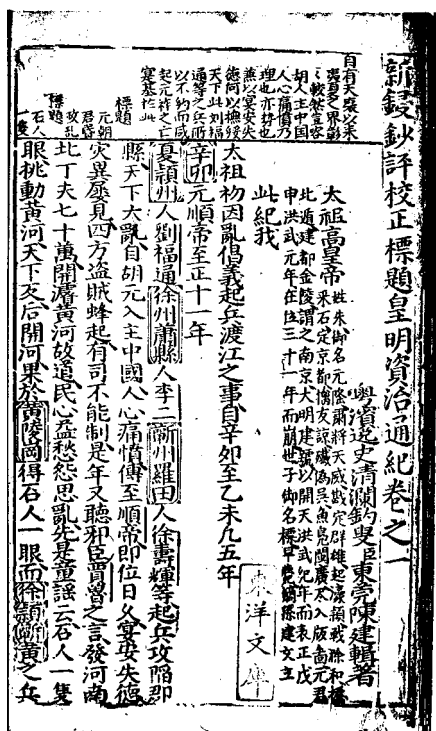


図 27 『新鐙鈔評校正標題皇明資治通紀』 封面（東洋文庫所蔵本）

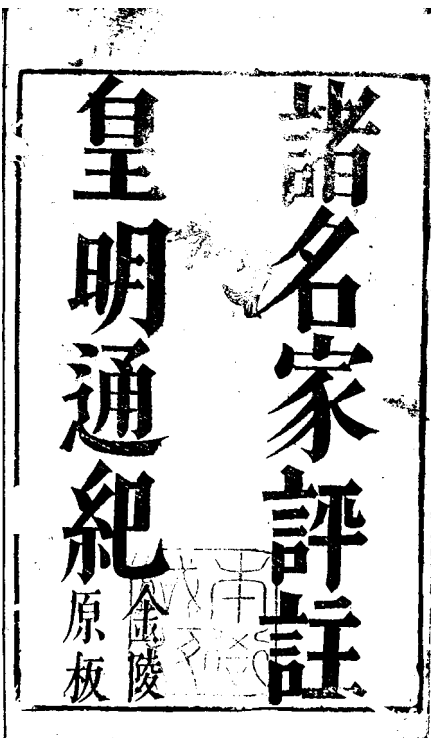


図 28 『新鐙鈔評校正標題皇明資治通紀』 卷末刊記（周心慧主編『明代版刻図釈』所収、中国の国家図書館所蔵本影印）

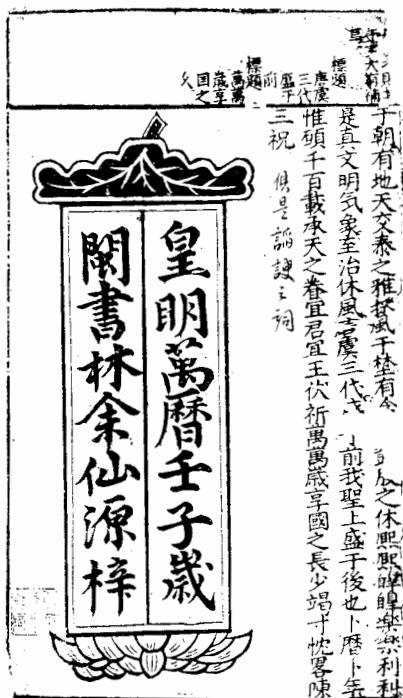


圖 29 『皇明典要』八卷本の卷一（四庫禁燬書叢刊所収、北京師範大學圖書館所藏本影印）

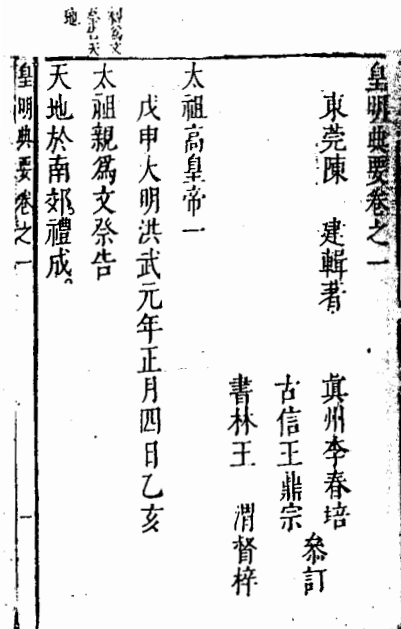


圖 30 『皇明紀要』八卷本の卷一（景印岫廬現藏罕傳善本叢刊所収）

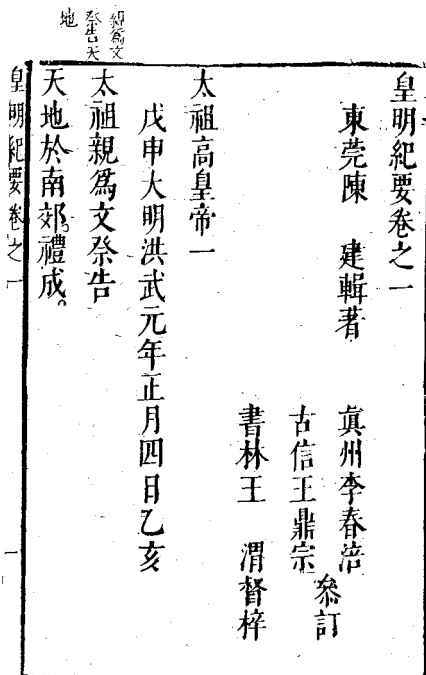


圖 31 『皇明十六朝広彙紀』卷一（四庫禁燬書叢刊所収、北京師範大學圖書館所藏本影印）

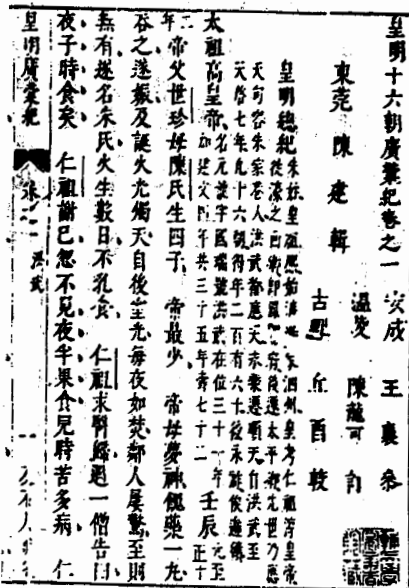


圖 32 『皇明二祖十四宗増補標題評斷實紀洪武卷一』（四庫禁燬書叢刊所収、北京大学圖書館所藏本影印）

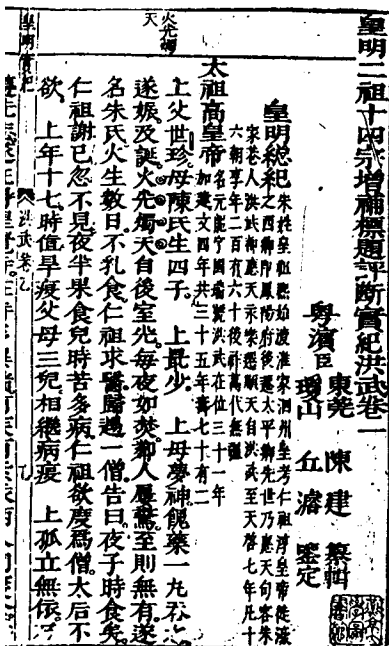


図33 『皇明二祖十四宗增補標題評斷実紀』二十七卷本の封面（国立公文書館所蔵内閣文庫本）



図34 『皇明二祖十四宗增補標題評斷通紀』二十三卷の巻四（台湾の国家図書館所蔵本）

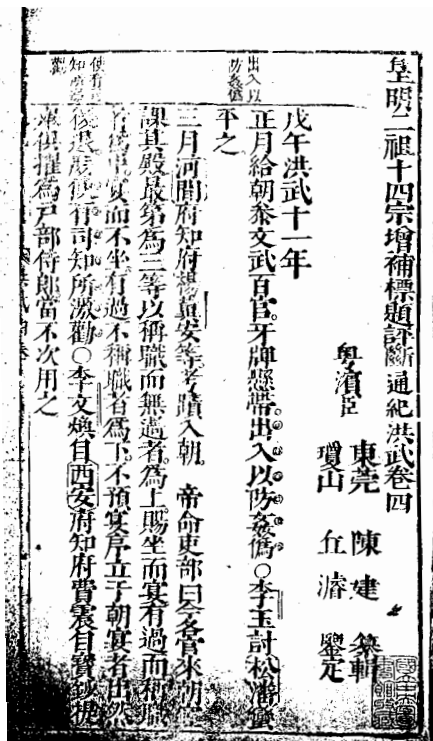


図35 『皇明二祖十四宗增補標題評斷通紀』二十七卷の巻一（慶応義塾大学図書館所蔵本）

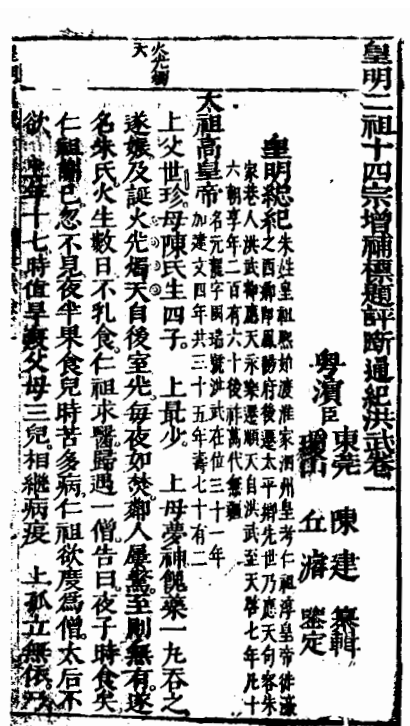


図36 『皇明二祖十四宗增補標題評斷通紀』二十七卷の封面（慶応義塾大学図書館所蔵本）



圖 37 『皇明通紀法傳全錄』卷一（續修四庫全書所收、浙江圖書館所藏本影印）

皇明通紀法傳全錄卷一
 雲間 吳 棧 著 武林 高汝祚 訂
 太祖高皇帝紀 帝生千歲光武皇帝 人成萬壽 元漢
 王 崇 大 平 樂 慶 及 正 南 昌 武 昌 南 淮 南 浙 寧 吳 王
 是 一 天 下 即 皇 帝 位 三 十 一 年 庚 辰 閏 五 月 初 十 日
 歲 次 庚 辰 上 歲 日 帝 御 文 武 欽 明 啟 運 紀
 辛卯元順帝至正十一年夏 穎州人劉福通徐州蕭縣
 人李二斬州羅田人徐壽輝等兵攻陷郡縣是時順帝
 即位日久宴安夫德失異屢見四方盜賊蜂起有司不
 能制又聽邪臣賈魯之言發河南北丁夫十七萬開濬
 皇明法傳錄 卷一 高皇帝

圖 38 『皇明通紀集要』卷一（東洋文庫所藏本）

皇明通紀集要卷一
 東莞 陳 建輯 太學 江旭奇訂
 太祖高皇帝
 壬辰 元至正十二年
 先是元順帝至正十一年夏 穎州人劉福通徐州
 蕭縣人李二斬州羅田人徐壽輝等起兵攻陷郡
 縣天下大亂自胡元入主中國人心痛憤至順
 帝即位日久宴安失德災異屢見四方盜賊蜂起
 有司不能制是年又聽邪臣賈魯之言發河南北
 丁夫十七萬開濬黃河故道民心益愁怨思亂

圖 39 『皇明通紀輯要』卷一（東洋文庫所藏、朝鮮古活字大字本）

皇明通紀輯要卷一
 東莞 陳 建輯著 舜水馬晉允 增定
 舜水孫 鑛原訂
 太祖高皇帝紀 帝即位三十一年
 辛卯元順帝至正十一年夏 穎州人劉福通徐
 州蕭縣人李二斬州羅田人徐壽輝等兵攻陷
 郡縣是時順帝失德災異屢見盜賊蜂起有司
 不能制又聽邪臣賈魯之言發河南北丁夫十
 七萬開濬黃河故道民心益愁怨思亂先是童
 謠云石人一隻眼挑動黃河天下反及開河果

圖 40 『皇明通紀輯要』馬晉允「皇明通紀序」末葉（東洋文庫所藏、朝鮮古活字大字本）

略信疑不敢憑臆獨於臣僚邪正之故無事微
 文亦使觀是書者某也德望隆某也猷略著某
 忠而罹患終蒙表卹某愚而寵榮卒至削奪生
 殺褒譏之間邪正之跡以分也學為正人戒為
 邪黨於以錮贊 聖明推夷大難豈惟 國家
 之損亦孔子之徒也然孔子處衰世而吾黨觀
 盛治故春秋猶並言知罪而草茅之臣不識時
 忌舉厥大端多所闕漏要於是非有歸芻言可
 採雖取譏當世所勿惜也時
 崇禎己卯秋月臣馬晉允謹書於敬日堂